

パラダイムシフト

—2100年への思考実験

第3部 紛争と国家の行方 ⑨

寄稿

水島司 (東大教授・南アジア近現代史)

足元の空間から共同性構築を

ネットが自分の日常に入ってきた時、目の前にはこれまでにない自由が広がっているかに見えた。ネットという仮想空間の中に住居を置くことができれば、肉体は空間から自由となり、無限とも思われる情報が世界の隅々から瞬時に届くことは外の世界との距離を消す。かつてはそこかしこに存在したに違いのない、しかし近代が喪失させてしまった「今、共に、生きる」という思いを、新たな道具がようやく再現してくれる。……はずであった。

それから数十年を経た今、この閉塞感はどこから来るのか。奇妙な解放感と、にもかかわらずつまたく孤獨感。無限に広がるかに見えるつながりと、その総体の軽さ。想像すらできなかったネットの広がりをもたらしたこの感覚は、クリミアの今が象徴する国民国家主義の新たな強まりの下で、グローバリゼーションがもたらしたのとはこれではなかったのかという思いと将来への疲労感を強めさせている。

グローバリゼーションの進展がもたらしたこの感覚の源を我々に気付かせた決定的なできごととは3・11の東日本大震災と原発事故であった。放射能という制御不能の暴力によって、今まで生きてきた空間を一瞬のうちに喪失した人々。もちろん、世界を見れば、家を追われ故郷を失った難民は少なくない。しかし、3・11は、それが21世紀の日本に起きてしまったということを我々に告げただけではなく、「今、共に、生きる」ことを約束したはずのネットには、自らの肉体が生きるかけがえのない「ここ」という場が決定的に欠けていることをも気付かせた。

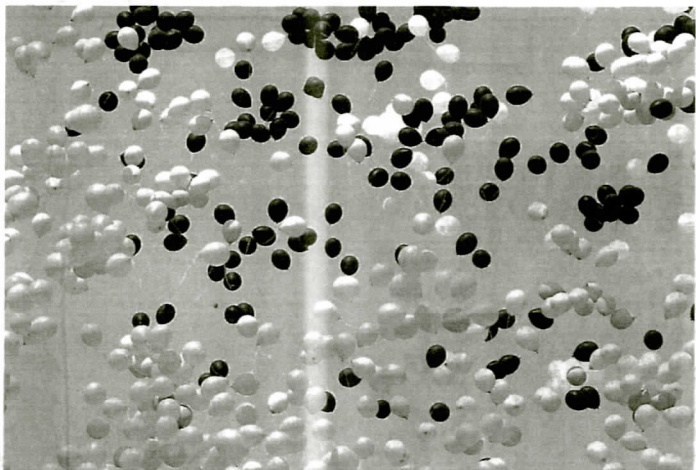
世界的な意味をもつのか。ヨーロッパ以降の交易の拡大は、地球大の経済発展を準備した。そこを舞台として西欧が主導した近代という時代は、植民地化という支配・被支配の構造化を世界規模で進めた。いち早く国民国家を成立させた西欧は、その凝集力を支配力に換え、他方支配地では人々の生きた空間を破壊し、連帯の芽生えを潰した。皮肉なことに、このような支配と従属の構造に抗して運動を主導した支配地の民族エリートたちも、抵抗の最も有効な手段を、国民という共同性を生み出しそれを基盤として国民国家を築くことの中にしか見出せなかった。大きな犠牲が払われ、独立が達成され、こうして今日、国民国家システムが地球を覆うことになった。

連邦の崩壊、欧州連合(EU)の拡大という国民国家システムの揺らぎと反比例して進んだネットの普及は、国民国家に代わる地球大を領域とした共同性を生み出すかにもえた。しかし、3・11は、その実現が遠い先にあることだけではなく、自らの肉体を置く「ここ」という空間こそが生の中核にあることを知らしめた。

「今、共に、生きる」ことの持つ意味がひとごととして根源的であるとすれば、21世紀の我々の方途は、「今、ここ」という足元の空間から「共に、生きる」ことを実現していくことにしかない。その際、グローバリゼーションの進展に抗するがごとくガヴァナンス(統治)という名で決定権の集中を図る国家に対してとりうる戦略は、「ここ」にある空間と自らがつながり、その決定に参加し、「共に、生きる」ことの内実を自身の手にたぐり寄せていくことであろう。その点に關し、悲觀的過ぎる必要はない。目を凝らせば、既にそこかしこにさまざまな動きと希望が出現していることに気がつくはずだから。

この閉塞を打ち破る突破口は、足元にしかない。

第3部は今回で終了。第4部は5月開始予定です。



一梅村直承撮影

このような状況下での国民国家主義の強まりは、どのような